傭兵TS娘が敵の惑星から脱出しようとする話

皆方 ho_

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

いつもの戦場だと思ってた。

知らない義体だったこと以外は。

汎用ＡＩに致命的な欠陥が見つかり、戦闘機械は傭兵が脳をコピーして操（あやつ）る有機義体に取って代わられた世界。

主人公の傭兵リルは、惑星トラピストで作戦中に元の身体を失ってしまう。

軍から見捨てられた傭兵ＴＳ娘が敵惑星からの脱出を目指して仲間と共にがんばるお話。

目　次

知らない義体だ……　1
星系同盟の義体　8
休憩　15
プラントAにて　23
合流　30

知らない義体だ……

「戦闘員ＩＤ５０６３２８。データを入力中……完了しました。適合義体を確認……適合率は１００％です。」

あれ？何かおかしい。
意識が移行する。深く、深く。
浮かんだ小さな違和感もそのまま消えていってしまった。

「有機義体オールグリーン。記憶データのコピー完了……違和感はありませんか？」

……［Ｙｅｓ］
そして、また浮き上がる。
この先は戦場だ。
視界が切り替わった。
人間よりクリアな、有機義体の視界だ。
揺れる装甲車の車内。天井の電灯が薄暗く光っている。車内には、他にも有機義体が７人、並んでいる。
手を握り、開く。
腕を回す。
女性型特有の可動域の広さだ。
割り当てられたのは女性型義体らしい。
着せられた戦闘服がややオーバーサイズだが十分動ける。
問題はなさそうだ。

「作戦８６２７号。本日の作戦を説明します。惑星トラピスト第５９地区に存在する武装勢力の拠点を破壊あるいは制圧することが目標です。作戦には第５０隊が参加します。５０６小隊は市街地の防衛

線を破壊し、工場プラントＡを制圧してください。第５９地区には惑星燃料プラントおよび、工場プラントがあり、これらを破壊すると惑星汚染の可能性があるため、可能な限り歩兵戦闘による決着が求められます。また、敵勢力は……」

目の前に展開されるホログラムの地図。

すっかり聞き慣れた合成音声の説明を聞いていると、横から声をかけられた。

「よぉ、今日も平常運転か？リル？」

「あぁ、大丈夫だ。俺らが全滅したことなんて一回しかないぞ？　今回も大丈夫さ。」

「まあそうだろうな、終わったらまた打ち上げ行くか？　それとも女と予定でもあるか？」

まあ、リル（小隊長）に限ってそんなことはねえな、などと惚けるのは、傭兵仲間のウィルフ・バーニー。

お調子者だが、荒くれ者の多い傭兵の中では信頼できるやつだ。

ウィルフの冗談に笑いのさざなみが起こった車内。

笑いのダシにされたことにイラッとしたが、こんなところでイラついてもしょうがない。

「打ち上げか、いいな。今回死んだやつの奢りにしよう。……ウィルフ、今回の仕事、背中には気をつけろよ」

仕返しとばかりにはやや悪趣味な冗談を吐く。

「うわ、それはヤバいぜ、小隊長。冗談になってませんって」

再び笑い声の起こる車内。

それをきっかけに静かだった車内は各々の雑談で喧騒にまみれて

いく。
みんなの緊張はほぐれただろう。
それに、今回が初陣のやつもいる。
「アルベリック、お前は今日は俺らと組む。スリーマンセルだな。お前さん、どこまでならった？」
一瞬慌てた後、アルベリックが答える。
「あっアルドで一通りの訓練は受けました！　小隊長殿！」
「チッ、アルド出身なのかお前。…じゃあ一通り使えそうだな。あと、殿はつけなくていい」
「はっはい。」
アルドと聞いてつい舌打ちが出てしまった。
あそこは嫌いだ。
アルドはいくつかある傭兵集団の中でも最も大きい。孤児に教育をして、傭兵を育てているので、アルベリックもそう言うクチだろう。
「え？　なになに？　アルド出身なの？　アルって呼んでいい？」
やけに馴れ馴れしくウィルフが話しかけてる。
止めようか？
まあいいか、放っておいた方が部隊に馴染むだろう。
「ウィルフさん、なんで小隊長いきなり不機嫌になったんですか？」
「まあリルは、昔に色々あったんだな。傭兵じゃよくあることだ。」
「昔って…何があったですか？」
「残念ながら、俺にも教えてもらってないんだ。それよりひとつ大事なことを教えてやる。アル、傭兵の間で過去を詮索するのはダメだ。あくまでマナーだがな。だからそんなこと聞くなよ。他の傭兵から

信頼されなくなるぞ。」
「そうなんですか、すいません…ご忠告ありがとうございます。」
「作戦区域到達まで、あと五分です。準備をしてください」

唐突に車内に響く、合成音声。
車内は一気に張り詰めた空気になる。
俺は声を張り上げる。

「作戦は頭に入れたな?点検をしながら聞け。今回の編成は少し変わる。新人のアルベリックは俺とウィルフで見る。オルヴァーのペアはいつも通り、ブローマンのペアにバートを入れろ」
「「「「了解!」」」」」
「さて、準備はいいな?」

車両が目的地についたのか。ガタンと地面に接地する。
警告音と共に、後ろのハッチが開く。

「急いで出ろ!」

止まっている装甲車などただの的だ。
全員が駆け出す。
あたりには耳障りなレーザーの砲声や爆発音があふれかえっている。
ここは、戦場だ。

装甲車から飛び出し、即座に物陰に隠れる。
第５９地区は惑星解放戦線の支配地域で、工業都市だ。周辺には市街地が広がっている。。

「正面！　通りの向こうに敵部隊だ！」

大通りは障害物で封鎖され、ところどころに汎人連（味方）の重戦闘車が撃破されて転がっている。

通りの先の方には解放戦線の防衛線であろう陣地がこちらに銃口を向けている。

貧乏くじを引かされたな、これは。

重戦闘車まで投入して突破できないところを支援ユニットも無い歩兵の小隊で突破させるのか。

「さすがに大変だなこれは……ブローマン、オルヴァー、お前らは装甲車とともに敵をけん制しろ。その間に俺たちは建物伝いに側面にまわる。ウィルフ、いくぞ！」

五人と自動運転の戦闘車を残し、三人で建物の中に入る。

入ったところは商店だったようで、床には商品が散乱している。

二階にあがる階段を駆け上がる。

大通りに垂直な壁の前に立ち、拳を固める。

「フッ！」

ドンッと音を立てて壁に穴があく。

有機義体の身体能力あってこその荒業だ。

そのまま大通りにそって敵陣地側の壁をぶち壊して進んでいく。

「小隊長、溶断ナイフ使ったほうが良くないですか？」

走ってついてきながら、アルベリックが聞いてくる。

「時間は短いほうが都合が良い。囮に置いてきたやつらの負担を減らせる。」

ドンッ!!!!
「きゃっ!!!!!」

そう答えながらさらに民家の壁を破壊すると、悲鳴が聞こえた。
崩れた壁の向こうには、逃げ遅れたのだろうか？　部屋の隅でヘルメットをかぶり棒をもった父親と、その後ろには妻か娘かわからないが女が不安そうな眼でこちらをうかがっていた。

「ッチ！めんどくせぇ、民間人（敵のゲリラ）かよ!!殺すか？小隊長。」
「おちつけ、ウィルフ。たぶん本当にただの民間人だ、殺すな。アルベリック、武装解除させろ。」
「はっはい！」

即座に殺す選択肢を出してくるウィルフはこの戦場に慣れてしまっているのか。他の部隊ならやっているだろうが、俺は嫌だ。
そんなことを考えつつ、両手をあげて武装解除（といっても棒一本しかもっていなかったが）させた住民をおちつかせるためにフェイスガードをうえに跳ね上げる。
人を落ち着かせるためには表情が見えたほうが良いからだ。

「おい、お前たちは殺さないから安心しろ。住民ＩＤは？」
「も、持っていません…すいません、解放戦線のやつが来たときに持っていかれてしまったんです。お願いです、妻は殺さないでください!!」
「なるほど」

やけに驚いたような顔をして、男が答える。
持っていないらしい。
身分の照合ができないとなると、殺してしまった方が……いやダメだ。そんなこと考えるな。それじゃフロンティアのシンジケートと同じじゃないか。

にしても、なんでこの男は驚いているんだろう？後ろの女もやけにじろじろと俺の顔を見てくる。

「どうした？俺の顔に何かついてるか？」

「いえっ軍人には美人な人もいるんだなと驚いてただけです。」

だから命だけは…なんてまたもや命乞いを始めた男は放置でいいだろう。

……美人とはどういうことだ？

ウィルフならわかるかもと、チラッとウィルフの方を向くと、ウィルフは俺を見て、全力で笑いをこらえていた。アルベリックもヘルメットごしにやや困惑した表情で俺の顔を見ている。

よくわからないが、自分が笑われていることはわかり改めてイラっとする。

「おい、なんで笑いをこらえているんだ？さっさと説明しろ。」

「ちょっｗｗおまっリルｗｗ１回自分の姿確認しろｗｗｗ」

戦場にいるときには小隊長と呼んでくるはずのウィルフの口調が崩れている。そこまで面白いことなのか。

急いでウィルフに視覚を同調させる。

「え？」

そこに映っていたのは、ヘルメットのバイザーをはずしたその顔は、

――――到底戦場にいるとは思えないような、白い髪の毛に赤い眼の小柄な少女だった。

星系同盟の義体

そこに映っていたのは、到底戦場にいるとは思えないような白い髪の毛に赤い眼の小柄な少女だった。
白い髪は肩口でにわずかにかかる程度の長さ。赤い眼は睨んでいるのかよくわからないジト眼だ。整った顔は、だが無表情も相まって少し怖い。
なんだこれ。
有機義体にここまでの美少女があるのか？
有機義体はクローンだ。だから型番一覧に載っているはずだが、こんなものは見たことが無い。
ここまで驚いているのに表情も一切変わらない。
試しに色々な表情を作ろうとしてみる。
笑った顔、驚いた顔。にらんだ顔。
わずかに顔はピクピクと動く。だが、相変わらずの無表情。
表情筋が壊れているのか？
なるほど。

「有機義体の試作型か、大方、在庫処分だな、これは。」
「小隊長、それは大丈夫なんですか？」
「アル、大丈夫だ。小隊長はこの程度で死ぬような器じゃあない。この前なんかエリダヌスのバーに……」
「おまっちょっと待て、それ以上言ったら、抗命で撃つぞ。」
「隊長権限の横暴だー」

はぁ。
サラリと最近の黒歴史を話そうとしたウィルフに帰ったら何をしてやろうか考え、曲がりなりにも民間人の前で何やってんだ？と正気に戻った。
それにしても、何でこんなモンが戦場の一兵士に割り当てられてる

んだ？
――何か欠陥があるかもしれない。注意したほうがいいな。
だが……
もう一度、手を開いて握る。
グー、パー、グー、パー。
反応速度がかなり速いな。
戦闘が捗りそうだ。
仕事終わったら軍の担当者に聞いてみるか。お役所仕事のあいつらからすぐに返答が帰ってくるとは思わないが。
ガン!!!
「小隊長、まだですか？」
思考に没頭していたら、外から、大きな金属音が響いてきた。それと同時に通信も。
「すまん、民間人がいてな、少し手間取っただけだ。そっちは大丈夫か？」
「狙撃で何人かは殺しましたが、装甲車がやられました。帰りは車を調達しなきゃいけません。小隊長、早くしてください。」
フェイスガードを下ろし、ヘルメット内に投影される戦況を確認する。
急いだ方がいいなこれは。
「わかった。リック、ウィルフ、行くぞ、作戦再開だ。」
「はい！」「おう‼」
男女にここから動かないよう命令し、また壁を壊して移動する。
再び壁を壊したとき、男の方が、大事な家が‼？と叫んだが、銃を向けると黙った。
さらに何軒か、建物の壁を破る。
そうしてやっと、陣地の側面にたどり着いた。

様子を見る。敵は戦闘用義体のやつらが何人かに対車両用の爆薬発電式レールガンが一基。
重装甲車が撃破されたのも納得だ。だが、ほかは生身の兵士が数十人しかいない。
置いてきたやつらと連携するため、通信機を操作する。

「小隊各位へ、敵は義体を装備している。注意しろ。ブローマンのチームは合図に合わせて突撃、オルヴァーのペアは続けて狙撃だ。そちらも大丈夫だな？」
「大丈夫です。小隊長。」
「よし、攻撃開始。」
アルベリックが合図に合わせてグレネードをレールガンの砲座めがけて投げ込む。
即座に銃撃を開始する。通りにいるオルヴァーのチームも合わせて突撃している。

「優先的に生身のやつを狙え！」

始めに投げたグレネードでレールガンは潰せた。
レールガンの操作員は生身だったようだ。
義体なら身を挺してレールガンを守る選択肢もあっただろうが、解放戦線には戦闘員を全員義体にする財力はないのだろう。
銃撃、リロードのため身を隠す。入れ替わるようにウィルフが銃撃を始める。アルベリックもやや遅れて銃撃を始めた。

「アルベリック、気を引くだけでいい。危ないと思ったら隠れろ。」

アルベリックの行動が不安だ。訓練通りやっているのはわかるが、行動に迷いが多い。
後ろに下がらせた方がいいか？
初陣が被撃破から始まるのも後々悪影響が出そうだが。

銃撃、リロード、銃撃。仲間をカバーするため交代で銃撃を続ける。
通りを向いているやつは俺達の銃撃で倒れていく。
こちらを向いているやつも通りの向こうからのオルヴァーのペアの狙撃でやられていく。
生身の奴らはあらかた潰せたが、義体のやつらはまだ生き残っている奴も多い。
その中の一体の義体がこちらに向かって突撃してきていた。
かなり素早い動きで、銃撃の射線を回避している。
最新型か？解放戦線にそんなものを手に入れる余力があったのか？
それに、義体の中の人間もかなり上手い。
いずれせよ、あれは早くつぶしたほうがいい。

「速いのは俺がやる。ウィルフ、アルベリック、援護しろ。」
「了解、決闘の邪魔立てはさせませんよ、お嬢様。」

この期に及んで義体のことで煽ってくるウィルフは本当にどうかした方がいいかもしれない。お調子者だがモテるのだ。その女性向けの態度をこちらに向けるな。色男め。

「ウィルフ、ライフル預ける。アルベリックを殺させるなよ。それとナイフ貸せ。」
「おうよ」

ウィルフに小銃を預ける。入れ替わりでナイフを受け取る。
拳銃を抜き、安全装置を外し、残弾を確認する。反動の大きい火薬式。大気圏内での戦闘では火薬式の方がメリットが大きい。よく使う拳銃だ。
腰の自分の溶断ナイフも抜いたら電源がつくようにセットする。

「ウィルフ、何かあったら指揮はお前だ。」

「そういうこと、言わないほうがいいぜ。小隊長。」
「撃破されても死ぬわけじゃない。確認は大切だ。」
「そりゃそうだが、気持ち的にな。」
「じゃ、行ってくる。」
「話聞かねえなぁ」

左手にウィルフに借りたナイフ、右手に拳銃を持ち、物陰から飛び出す。
相手の移動するルートに飛び出して拳銃を構える。
パンパンパン‼?と三発、引き金を引く。
「っ!!!!」

いきなり目の前に飛び出してきた俺に敵の義体は驚きつつも拳銃の銃撃はきれいによけやがった。
厄介だ。
もうすでに相手との距離は1mもない。
速度に乗った義体は急には止まれないのだろう。そのまま近づいてくる。
左手に持った溶断ナイフを敵の顔面めがけて投げ、そのまま相手のライフルを持った右手を左手で跳ね上げ、狙いを無理やり外させる。
投げたナイフは相手が顔を反らしたことでヘルメットにあたり、相手のヘルメットを吹っ飛ばした。
がら空きになった胴に回し蹴りを入れて吹っ飛ばし、距離をとる。
さて、いったいどこの義体だ?
ヘルメットが外れた敵の顔を見る。

「おいおい……星系同盟が出資してるってことか?」

独立星系同盟の最新の有機義体だ。情報を見たことがある。
解放戦線にそんなものが買えるとは思えない。星系同盟は技術と経済を握る商人の国だが、軍事力では汎人連に遠く及ばない。喧嘩を

売るようなことをなぜするんだ？
今考えることではない、と思考を切り替える。
起き上がりつつ小銃を構える敵の義体に拳銃を向け、発砲する。
小銃を盾にして防がれたが、これでその銃は使い物にならなくなっただろう。
敵は小銃を投げ捨てた。
ナイフを抜き、あらためてこちらに向かってくる。
拳銃を撃つが、全て避けられる。
弾切れだ。
リロードする余裕はない。
拳銃を左手に持ち替え、右手で腰のナイフを抜く。
お互いの武装は同じ。
敵はフルアーマーの戦闘服だが、こちらは合成繊維に装甲プレートを縫い込んだ軽装の戦闘服だ。溶断ナイフは防げない。
体格差によるリーチの差も大きい。
溶断ナイフではアーマーを貫通するのに数秒かかるだろう。
頭を狙うしかないな。
左下から右上に振るわれるナイフを右に体を逸らして避ける。敵は即座に右上から真下にナイフが振るわれる。
後ろに下がって避ける。
振り抜かれた相手の腕に、ナイフを振るう。
狙うのは関節部、装甲プレートの無いであろう肘の裏だ。
ズシュッと音を立ててナイフが刺さり、次いで肉の焼ける音がする。
さらに肉を抉る。
腱が切れたのか、敵がナイフを取り落とす。
カランカランっと音を立ててナイフが転がった。
敵は右腕を振り回し、刺さったナイフごと俺から離れようとする。
チャンスだ。
左手に持った拳銃を投げつけ、地面に転がった敵のナイフを蹴り上げる。

投げつけられた拳銃に一瞬怯んだ敵は、右手に刺さったナイフを抜くのが遅れた。
その遅れが致命的だった。
その隙に蹴り上げたナイフを手に取り、体当たりと共に敵の首元に刺し込む。
両手が塞がり、投げられた拳銃を避けて体勢を崩した、その状態でさらにもう一本のナイフを避けられる道理は無かった。
血飛沫が飛び、顔にも血が付く。
戦闘はたったの３０秒ほどで、終わった。

休憩

「小隊長、大丈夫か!?」

銃声、そして自分を呼ぶ声。
周囲の音が戻ってくる。
よほど集中していたのか、周りの声が聞こえていなかったようだ。
珍しくウィルフが焦ったような声を出している。
目の前には首にナイフが突き立てられた死体。
その顔は血飛沫で赤く染まっている。
自分の顔もだ。
なんでヘルメットを被って、フェイスガードも下げているのに、顔に血が付いているんだ？

「あっ」

顔に手を当てて、気づく。
避けれたと思っていた敵のナイフの振り上げは、ヘルメットのフェイスガードを掠っていたのだ。フェイスガードが半壊している。
自分の客観的な様子を確認しよう。
フェイスガードは壊され、顔は血にまみれている。
敵と刺し違えたとでも思われているのか？
小銃二挺持ちのスタイルで敵を牽制しながらウィルフが近づいてくる。

「リルっ大丈夫か!?」
「大丈夫だ。俺がやられるように見えるか？」
「よかった、おまえが撃破されたら、俺が指揮を引き継がなくきゃならなくなってめんどくさいところだったぜ。」

大丈夫ってわかった瞬間に、こいつは。
まあ戦闘ログに録音されてるだろうから、後から切り取ってからかおう。
ウィルフから預けていた小銃を受け取る。
まだ敵は残っている。
といっても、最強格の義体が撃破されて、逃げ腰の旧式義体が数体だけだが。
そもそもの装備からして、差があるのだ。
敵の小銃は低い技術で作れる実弾銃なのに対して、こちらはパルスレーザー銃だ。
フルアーマーも星系同盟製のあの義体しか着けていなかった。
最強格が撃破されたことで、立ちすくむ敵を見回し、睨む（無表情だが）。

「次にかかってくる奴は？」

敵を挑発するが、乗ってくるやつはいなさそうだ。
おびえた敵は一歩も動こうとしない。うまく気押されてくれているようだ。
緊張が張り詰める。
敵の注目を自分に集めているうちに、小隊の俺以外全員が合流し、射撃体勢に入る。

「う、うわあああああ!!!」

恐怖と緊張に、耐え切れなくなったやつが突っ込んできた。
シュン!!
横にいたウィルフの銃撃で倒れこみ、動かなくなる。
それをきっかけに、残った敵が一斉に逃げ出した。

「なんだ、いないのか……逃すな、撃て」

シュンッシュンッとレーザー銃の射撃音が一斉に鳴り響く。
小銃を構えようとした奴もいたが間に合うわけがない。
敵は、当初の予想よりあっけなく全滅した。

何人か撃破されるかと覚悟していたが、終わってみると新型の義体以外は拍子抜けするほどに楽だった。義体を着ただけの素人だ。
重装甲車が撃破されていたのもレールガンが相手で相性が悪かっただけか。

「所詮、素人のゲリラか。終わったな。逃げた奴はいないか？全員の死亡を確認しろ。」
「「「「「了解!!」」」」」

小隊の仲間が散り散りになって死体を確認していく。
俺も拳銃とナイフを拾うついでに死体を確認していると、ウィルフがニヤニヤとした顔でよってきた。

「なんだ？借りたナイフなら、ほら。」

どうせ別のことだろうが、借りたナイフは一応返しておく。

「いや～小隊長って役者だな。その身体（義体）にすぐに適応して、その声で相手を威圧できるなんてさ。」

その言葉で気付く。
ヘルメットが壊れたせいで、ヘルメットに取り付けられた無線機も変声機も当然壊れている。

「あーあー」

声が高い。間違いなく少女のものとわかる、だがかん高くはない、落ち着いた声。

変な気分だ。

さっきからずっと、この声で敵を威圧する小技やってたのか……

いまさら理解して落ち込む。

「だれか、突っ込んでくれよ……」

「ハハハ、だれも突っ込めねえだろ、おまえ隊長だぞ。」

「そりゃそうだけどさ……」

「あとで、戦闘ログ録音して、送ってやるよ。」

「黒歴史、抉るのやめてくれ……」

最悪だ。

せっかくからかい返すネタを手に入れたと思ったら、一瞬で黒歴史を更新してしまった。

ウィルフはどれだけ俺をからかう気だよ。

ウィルフと雑談をしていると、やや元気が無いアルベリックが駆け寄ってきた。

「死体の確認、終わりました。」

「ああ分かった。少し休憩だ。」

アルベリックは気が抜けたように、瓦礫に座り込む。

水を飲み、そして俺の顔を見て、タオルを差し出してきた。

「顔の血、拭いてください」

「確かにそうだな。……アルベリック、他の奴らは?」

顔の血を渡されたタオルで拭うと、他の隊員の様子を見る。

あいつらは、笑いながら死体から財布を漁っていた。

「あいつらは…まったく」
「止めますか？小隊長」

止めるだけ無駄だろう、と首を振る。
元来、傭兵は強さしかないロクデナシが多い。
軍も多少のことには眼をつぶるだろう。住民の虐殺も隠蔽するくらいだからな。
それに。

「住民ＩＤがあったら持って来てくれ。情報料が出るぞ。」

住民ＩＤは軍に提出すれば情報料が手に入る。任務の一つと言えないことも無い。
誰が敵か、味方かはっきりさせたがる奴らだからな。
大方、芋蔓式に家族も開拓星に送りこみたいだけだろうが。
通りには乗ってきた装甲兵員輸送車が炎上している。
車も必要だな。
路肩に止まった弾薬の積まれたトラックを見つける。

「ウィルフ、あそこの弾薬運搬車、使えるか見てきてくれ。」
「人使いが荒いな、まったく。」

ウィルフを追い払い、アルベリックに話しかける。

「おい、アルベリック。死体から金を取っている、あいつらをどう思う？」
「小隊長、こんなこと言っていいのかはわかんないですけど、気持ち悪いです。」

その返答は、少しの意外だった。
アルドの傭兵にそんな倫理観があったのか、アルベリックだけなの

か。
おそらく後者だろうが。
「……これが戦場だ。慣れていくんだろうな。そうなりたくないのなら、自分の判断基準を持ち、自分を見失うな。まあ、受け売りだがな。」
「はい。わかりました。」
少しマシな様子になったアルベリック。
初陣の仲間とは部隊が変わらない限り、結構長く付き合うことになる。
信頼をおけるようになれとまでは言わないが、ある程度は連携が取れなければ困る。
「小隊長、ちょっと気になることがあるんだが…」
死体をあさっていたブローマンが、呼んできた。
「何だ？ブローマン」
「倒した義体のヘルメット全部剥いでみたんだけどさ、これって全部…」
地面に散らばる義体の顔はどれも一様に、見覚えがある。
というよりも、これ全部、旧式だが星系同盟製の義体だ。
「ここまでやったら汎人連に睨まれるどころの話じゃないぞ。」
「なにかあるんですかね？」
「さあな。だが俺達が今考えることじゃないさ。あとで軍に報告しよう。」
さっくりと思考を切り替える。
残念ながら自分は集中することは得意だがマルチタスクができる

性質ではないのだ。
作戦に集中して、帰ってから考えよう。
「おーい、小隊長。燃料式だがちゃんと動くぞ。」
ウィルフが弾薬運搬のトラックに乗って戻ってくる。
「全員乗れそうか？」
「余裕で乗れるぞ。」
「よし、全員休憩は終わりだ。次の目標は５９地区中央部のプラントＡの制圧だ。車に乗れ。」
がやがやしながらも全員がトラックの荷台に乗りこむ。
俺もトラックの助手席、ウィルフの横に乗りこんだ。

おまけ　移動中　ウィルフ視点

「ウィルフさん、さっきのエリダヌスのバーって何があったんですか？」
運転中、荷台に乗ったアルが、わざわざ小声で、無線を使って聞いてくる。
リルはヘルメットが壊れてるから無線は聞こえない。
横に乗っているリルに聞こえないように、小さく返答する。
「そんなに気になるのか？」
「ちょっと、面白そうなので…」
「それはな、エリダヌスのよく行くバーに小隊長を誘って連れて行ったらな、バーテンダーの奴が、リルのことを俺の新しい彼女だと思っ

たんだよ。」
「ブフッ」
荷台から露骨に噴き出したような声が聞こえてくる。
他の奴も無線を聞いていたようで、
「知らなかったのアルベリックだけだろ？」
「あーあ、言っちまったな。知らないぞ、ウィルフ。小隊長に〆(しめ)られても。」
なんて茶化している。
いきなりうるさくなった荷台と、話している内容が聞こえたのだろう。
助手席のほうを見ると、リルがこちらをジト眼で睨んでくる。
「おまえ、話したな？」
「なんのことやら」
「チッ!!」
盛大に舌打ちして黙り込んでしまった。
運転中に殴りかからないだけ冷静だが、降りた瞬間にとびかかってきそうで怖いな。
あとで酒でも奢って機嫌取ろうか？

プラントAにて

目的地、工場プラントAに到着した。
先ほど戦闘した通りから数百メートルしか離れていないが、車を持ってきた理由は、何かあったときにすぐに逃げられるようにするためだ。
周りに敵がいないことを確認して、降りる。
全員が降りるのを待った上で、黒歴史を暴露しやがった、ウィルフに殴りかかる。
その瞬間、ブローマンに羽交い絞めにされた。
目の前にはアルベリックが回り込んできて、完全に説得しようとする流れだ。
こいつら、黒歴史の暴露の後で俺を止める相談までしていたのか。

「放せ、俺にはそいつを殴る正当な権利がある。」
「さすがに小隊長でもそれは通りませんよ、落ち着いてください。」
「止めてくれるな。ブローマン、さっさと放してくれ。」

ちくしょう。この義体、力がかなり弱い。
体格差を考えても、普通の義体とは筋肉の構成が違うのだろう。
周りを見回し、誰も自分の味方ではない事を確認する。
ついでにそいつらの後ろで笑っているウィルフの姿も。

「ウィルフ、まったく反省して無いだろ。」
「いや、悪いとは思っているが、アルの方から聞いてきたんだぞ?」

衝撃の新事実を聞いた。
まともに見えたアルベリックが、わざわざ人の黒歴史を聞くような奴だったとは。
やはり、傭兵に碌な奴はいないようだ。

「いいじゃねえか、アル以外には知れ渡ってた話だ。」
「だからこそ聞かせたくなかったんだが。おい、アルベリック、今の話本当か？」
「そ、その～……本当です、すいません!!」
「はぁ、お前ら、あとで何か俺に奢れよ。」
「はい!!」「わかった。」

これ以上、怒っても作戦に影響が出るだけだ。
そう思って矛を収めたが、ウィルフにいたってはこういうこと、何回目だろう？
ことごとく許してきているあたり、やはり、自分は甘いのかもしれない。

ブローマンが放してくれたので、説明と指示を始める。
「工場の中では通信がつながらないかもしれない。留意しろ。目標は工場の中にある中枢制御室だ。工場内部の地図は確認したな？」
隊員の様子も大丈夫そうだ。
「内部に入るのは俺のチームとブローマンのチームだ。オルヴァーのペアはここで待機しろ。」
「「「「「了解！」」」」」
「わかったなら出発だ。室内戦になるだろうから、注意しろよ？」
何かあった時のために、オルヴァーのペアを車に残し、残りの6人で工場の中に入る。
入り口のドアにも特に何も仕掛けられていない。

「小隊長、母艦との通信が切れたぞ、大丈夫か？」
「大丈夫だろう。工場の内部は電波暗室だ。」

この工場は汎人連が建設したレアアースの精錬工場だ。
建設時のデータによると制御室には回線が引かれている。
制圧後に軍のネットワークに接続して制御権を移動させればいい。
工場の建屋の内部はかなり暗く、広い。
カツ、カツ、と6人分の足音が反響する。
有機義体の眼は暗闇でもよく通るから大丈夫だが、そうでなければ懐中電灯が必要なくらい暗い。

「奇襲とブービートラップに警戒しろ。」

おかしい。工場内が静か過ぎる。
作戦開始の時点では稼動していた、はずだ。
この短時間で工場を止めて作業員は脱出できるのか？

「工場が動いていない。警戒を強めろ。」

道中にはブービートラップも伏兵も、何も無い。非常時でも動いているはずの監視カメラさえも沈黙している。
地図に従って階段を下り、中枢制御室の扉の前に立つ。
合図する。
ガラガラ、と本来は電動式であろう扉を開け、ブローマンとバートが中に小銃を向ける。

「だれも、いないか？」
「いないな。爆弾のたぐいも無さそうだ。」

グレネードをいつでも投げ込めるように構えていたアルベリック

が大きく息を吐く。
制御室の中。壁のコントロールパネルも操作盤も、全て沈黙している。
「まだ油断するな。俺とウィルフでシステムの再起動をする、他は警戒しとけ。」
「え、俺がやるの？」
「当たり前だ、ほら起動しろ。」
ウィルフに作業をまかせ、出入り口に退避する。
「小隊長!?ブービートラップあったら俺が撃破されるぞ!?」
「さっきお前がやったこと、許してないからな。さっさとやれよ。撃破されたら小隊全員の飯、奢れよ。」
「根に持ちすぎだろ、小隊長……」
誰しも、自分は無事でいたいのだ。たとえ死なないとしても、撃破されたくないのは当然の心理だろう。
日ごろの恨みを晴らせるのなら、なおさらだ。
「早くしろよ、ウィル!!、今日はお前の奢りになりそうだな。」
他の奴らも、囃し立てている。
唯一、アルベリックだけは、申し訳なさそうに手を合わせて祈っていた。
いやこれ祈りじゃない、弔いの合掌だ。死んだことにするな、死んだことに。
「まあ、ここまで何も無かったんだ、ここに何かあるとも思えない。はやく起動しろ。」
「入り口（ソコ）まで下がってるんで、安心感ゼロだよ!!」

失礼だな。自分が撃破されたら指揮が混乱するだろう。

「やればいいんだろ、やれば。」

その言葉と共に、電源ボタンが押された。

緊張の一瞬は文字通り一瞬で過ぎ去り、何事も無かったかのようにシステムが起動する。

ブービートラップは無かったようだ。

「ログ調べるから、ウィルフはネットワーク繋いでくれ」

「了解」

うなじをなでる。標準規格の端子が付いてることを確認し、ポケットからケーブルを取り出す。

首元の端子にコードを繋げる。コードの反対を制御盤に繋ぐ。

稼動時のログを義体に埋め込まれたチップに書き写していく。

この義体にも端子があったことに安心したが、機械に表示されたストレージの容量は２ＺＢと表示されている。しかも、そのほとんどは使用されているようだ。

こんなに容量があって何に使うんだ？ここまでデータを使うのなんて都市管理ＡＩくらいだぞ？

何に使われているのか確認しようとした瞬間、ウィルフが唐突に困惑の声を上げた。

「おい、おかしいぞ？軌道上の母艦とも、降下艇とも通信が繋がらない。」

「アンテナに異常は無いのか？」

「直接確認はしてねえけど、システム上は異常は無い。」

ネットワークかアンテナに問題があるようだ。

仕方ない。自分のことは後回しにして、今ある問題を解決しよう。
「外で待機しているオルヴァーに接続してみたらどうだ？」
「わかった、やってみる。」
少し操作を待ち、接続。
「アンテナは壊れてないみたいだな。オルヴァー、聞こえるか？」
『その声、小隊長ですか!?可能な限り早く、今すぐ戻ってきてください!!』
「何があったんだ？詳しく説明しろ！」
返答は無かった。
それっきり切れてしまった通信画面のスクリーンを見る。
「オルヴァーの方で何かあったみたいだ。制御キーの書き換えだけやったら急いで戻るぞ。」
その場でできる事だけやって戻る判断をする。
制御キーを書き換えて、解放戦線に工場が使えないようにする。
設置式爆薬は持ってきていなかったのでブービートラップはあきらめ、その代わりに、グレネードで制御盤を破壊する。
「急ぐぞ!!」
背後から響くグレネードの爆発音を尻目に、来た道を逆走する。
来る時に何も無かったのだから、当然帰りもなにかあるわけでも無い。
来たときよりもスムーズに入り口までたどり着く。
油断せずに周囲を見回し、オルヴァーのペアが待っている車を見つける。

オルヴァーともう一人は車の横で、呆然と空を見上げていた。
敵の姿も無く、車も無事だったことから安心しつつ、彼らに駆け寄る。

「オルヴァー！戻ってきたぞ、何があった!?」
「小隊長、そんなことより空を見てください!!」

その言葉につられて、上を見た。

そこには。

俺達の乗ってきた惑星降下母艦が、俺達の本体が乗った船が、

……爆発を起こし、撃沈されつつある光景があった。

合流

惑星降下母艦が撃沈された。
何が起こっている？
地上に墜ちていく母艦に、皆が意識を向けている。
誰が母艦を撃沈したんだ？敵なのは間違いない。けど惑星解放戦線が？
まだ、周りにいるかもしれない敵艦を探す。
どこだ？
周りを見渡していると、空に違和感を感じる。
都市から離れた方向の空。色合いが少しだけおかしい。
間違いない。艦載の偽装ホロだ。
あそこにいる。
次の瞬間、その空間の風景が揺らぐ。

「おいっあれを見ろ!!」

数キロ先の空中に、偽装ホログラムを突き破って現れたのは全長５００メートルほどの戦闘艦だった。
見たことが、いや乗ったこともある。たぶんあれそのものではないけど、同型艦には。汎人連の軌道降下艦だ。
そして、おそらく敵だ。

「ラム、あの船の詳細を調べてくれ。」
「はい」

電子戦型には敵味方識別と敵勢力の偵察のためのシステムが載っている。調べたら何かわかるかもしれない。

「畜生、対艦装備なんて持ってないぞ。どうしろっていうんだ。」

愚痴を言ってる間に解析が終わった。

「解析終了。軌道降下強襲艦ＯＤＳ―５型です。塗装からトラピストに配置されていた、９５号艦の可能性が高いです。５０年前の旧式艦ですね、前部貨物室には実体弾の対宇宙ミサイルが積まれています。それに偽装ホロの精度も高い。どちらも旧式艦に積むようなものじゃないし、識別信号も出していません。母艦を沈めたのはあの船だと思います。」

治安維持という名の反乱防止のための船だったのだろう。簡単に奪われたのなら元も子もないが。

軍からそんな話は聞いていない。

奪われたのもこちらに伝えなかったのか。

「軍の奴らは俺達に情報を回さなかったのか!?奪われたこと自体隠蔽されてたのか。」

「ってことは、反乱防止用の旧式艦に惑星降下母艦が撃沈されたのかよ。ついでに俺らの身体も。ふざけんな!!」

不安なのだろう。苛立ちをぶつけるかのように皆、文句を言っている。アルベリックは恐怖で青い顔をしているが。

今、するべきことはなんだ?

優先順位を考えて行動しなくては。

「全員、落ち着いて話を聞け。アレがこちらを攻撃してくる前に味方と合流しよう。この町に降下したほかの部隊、近場で連絡の取れるのはあるか?」

「えぇと、一番近いのは行政所の制圧に向かった５０２小隊です。制圧は完了したようですが。他の部隊は全て２ｋｍほど離れてますね。」

「わかった、５０２と通信を繋いでくれ。話すからヘルメット貸せ」

アルベリックからヘルメットを奪い、被る。

ブカブカだ。マイクに口を近づけて固定しようとしてもずり落ちる。

軍の標準ヘルメットを付けれないということは、先ほど壊してしまったヘルメットは専用装備だったのか。頭の防御を考えると、壊れたからただの重りだと思って捨ててきたのは失敗だったかもしれない。

ヘルメットの被り心地がいつもと全く違う。

いや、いつもと違うのは撃破されたら死ぬ、ということだ。

ああ、わかってるさ。この状況はかなりまずいんだ。

どうにかヘルメットを斜めにかぶり直し、手で固定する。

相手に通信を繋げる。

呼び出し音が鳴り、すぐに止まる。

相手が出たようだ。

「こちら５０６小隊、小隊長のリルだ。通信機の持ち主と違うのは、ヘルメットが壊れてしまったからだ。隊員に通信機を借りている。」

「５０２小隊、副隊長のアストロイだ。ＩＤは？」

「５０６３２８だ。照合してくれ。」

相手は慎重な性格なのか、状況的に疑心暗鬼になっているのか、傭兵番号戦闘員ＩＤまで聞いてきた。

慎重なのは悪いことではないが、急いでいるのだから早くしてほしい。少しイライラする。

「……照合できた。一体何の用だ？」

「すまないが隊長はどうしている？話し合いたい。」
「もう戦死した。撃破じゃなくてな。」
「……それはすまなかった。母艦が、敵に奪われた軌道降下艦にやられたのは知っているか？」
「あぁ」
「今すぐ合流したい。生存率を上げるためだ。我々がそちらに向かう。」
「わかった。到着までここで待機する。」
「よし、すぐに向かう。」

合流に異議は無いようだ。
素早く話がまとまったことに安心する。

「……から、お前ら、死んだら死ぬってこと忘れんなよ。生き残るぞ‼？」

ヘルメットを外すと、ウィルフが仲間を元気付けているようだった。
俺が何も説明せずに通信に没頭しているうちに、代わりにやってくれていたらしい。
まだ熱弁を振るっているウィルフの肩を叩く。
振り向いて熱弁を止めると、ニッコリ笑ってサムズアップしてきた。
よくやった、と手でグッドを返すと、また隊員に向き直った。
まだ喋るのか？

「こんな小隊長だが、気遣いのできる良い上司だ。ついていけば生存間違いなしだ！」

うん。恥ずかしいわ、これ。
止めよう。

「もう良い、ウィルフよくやった。さて、全員すぐに出発だ。行政所の味方と合流するぞ。軌道上には他にも味方艦がいるはずだ。降下艇の一隻くらいは来るだろう。希望はまだある。行くぞ。」
「「「「「了解」」」」」
全員、次々とトラックに乗り込んでいく。
全員が乗ったことを確認して、助手席に飛び乗る。
すぐにトラックは走り出した。
工場を離れ、市街地中心へ、１ｋｍも無い道のり。
敵の襲撃も無く、静かだ。本来なら市民で賑わっているはずの町並みは人っ子一人見当たらない。
町並みにエンジン音が響きわたる。
市民は全員逃げたのだろうか。数万人が住む工業都市がここまで静かなのも奇妙だ。
大通りに入ると、行政所が見えてきた。
行政所は、殖民惑星の都市としては高層の五階建ての建物だった。
放送通信施設としても使われるらしく、上部には大型アンテナが取り付けられている。安価で頑丈なコンクリート製の建物だが、窓ガラスのほとんどは割れている。
前を走る大通りは特に戦闘の後が激しい。防御用の障害物で、車は通れなくなっていた。

「車は降りるぞ。出発しやすい位置に止めろ。」

車を降り、５０ｍほど進むと行政所だ。
前には装甲車が止まっている。通りの反対側からなら車でも入れたようだ。
入口は特に戦闘の後が残っていた。
窓は割れ、シャッターも大きく抉れている。黒く焦げ付いた爆発痕は手榴弾だろうか。「第５９地区行政所」と書かれた看板は割れて地面に転がっている。

周りを観察していると中から足音がした。
建物内に銃を向け、目線だけウィルフに向けると首を振られた。リルだけヘルメットが壊れていて、味方の位置が見れないため。
敵ではないようだ。
銃を下げ、出てくるのを待つ。
出てきたのは、突撃型の義体だった。

「あなたがアストロイか？」

問いかけると、しばらくこちらを見て、固まった。

「おまえが５０６の隊長なのか？」
「ああそうだ。５０６小隊、隊長のリルだ。よろしく。」
「あ、ああ。よろしく。ヘルメットが違うから声も違うとは思っていたが、ここまでとは。」

反応に少し苛立つ。
ヘルメットの変声機のおかげで、この声でもスムーズに話が進んだのか。
こんな所で自分の見た目が問題になるとは。
全員義体なのだから、見た目など関係ないはずなのに。
ムッとしつつも、互いに敬礼。

「早速だがすこし見てもらいたい物がある。実際に見てもらった方が早いと思うからついて来てくれ。電子戦型に来てほしい。」
「ん？わかった。隊員は？」
「休憩させてもいいし、させなくてもいい。我々の他の隊員は休憩中だ。」

なにかあったのだろうか。
とりあえず、建物の中に入る。

入ったところは待合室だったのか、長椅子が並んでいる。
そこで義体の兵士が二人、武器の整備をしながら雑談していた。

「おい、５０２は何人生き残っているんだ？」
「私を含めて３人だけだ。」
「そこまで減るってのは、何があったんだ？」
「アレですよ。」

部屋の端すみの方を指差され、目を向ける。
そこには１０体ほどの死体が転がっていた。

「すべて十分な錬度を持った傭兵だった。星系同盟の義体だ。」
「それは……」

俺たちが遭遇した奴と同じレベルの奴が部隊単位でいたのか。

「完全に待ち構えられていたんだ。もういいだろう、行くぞ。」
「ちょっと待て。各自、気になる奴はついて来い。他の奴は休憩だ。ラム、お前は確定だ。」

ウィルフとオルヴァーはついて来るらしい。
他は休憩するようだ。
アストロイについて、階段を上がっていく。
通路には義体以外の戦闘員であろう死体も転がっている。
その中で気になる死体を見つけた。
手が縛られ、目隠しをされた戦闘員ではないと思われる死体。

「アストロイ、この死体はなんだ？」
「ああ、奴らが捕虜にしていたこの行政所の職員だ。大方体制派とか独裁者の狗とかそんなところで殺したんだろう。」
「誰が殺したんだ？」

「そんなこと問い詰めてどうする気だ？」
「いや、問い詰める気はない。気になっただけだ。」

無表情が祟って問い詰めているように見られたようだ。
だが、今の反応から見てこの死体をつくったのは、解放戦線の奴らではなく５０２小隊の誰かだろう。アストロイが命令したか直接やった可能性も高い。
こいつは信頼できない。戦場ではこいつに背中は預けれないな。
うちの部隊は全員、最低限直接的な略奪はしないモラルがある。
それを他の部隊に求めるのは無理があるだろうが。
二階、三階、四階。
階段を上っていく。

「着いたぞ。これだ。」

目的地は屋上だったようだ。
ドアをあけ、屋上に出る。
屋上にはアンテナがついた鉄塔……の横に高さ２ｍ、横幅は４ｍもある機械が鎮座していた。
破壊されたその機械は上部に巨大な半球型の出っ張りがあり、昔の天文台に似ている。

「これはなんだ？」
「都市規模の大型対空偽装ホロ装置です。本来この町にあるわけがありませんね。」

疑問を口に出すと、すぐにラムが答えてくれた。
ラムを呼んだのはこのためなのか。

「やっぱりそうか。それが知りたかっただけだ。戻るぞ。下で詳細を教えてくれ。」

本当にこれだけだったらしい。ウィルフも拍子抜けした顔をしている。

アストロイはさっさと階段へ戻っていく。

「あー全員、下に降りるぞ。」

アストロイに続いて下に降りる階段へと向かおうと歩を進めた瞬間、ザンッ!!と耳障りな着弾音。

急いで音のした方を見るとラムが倒れ伏していた。